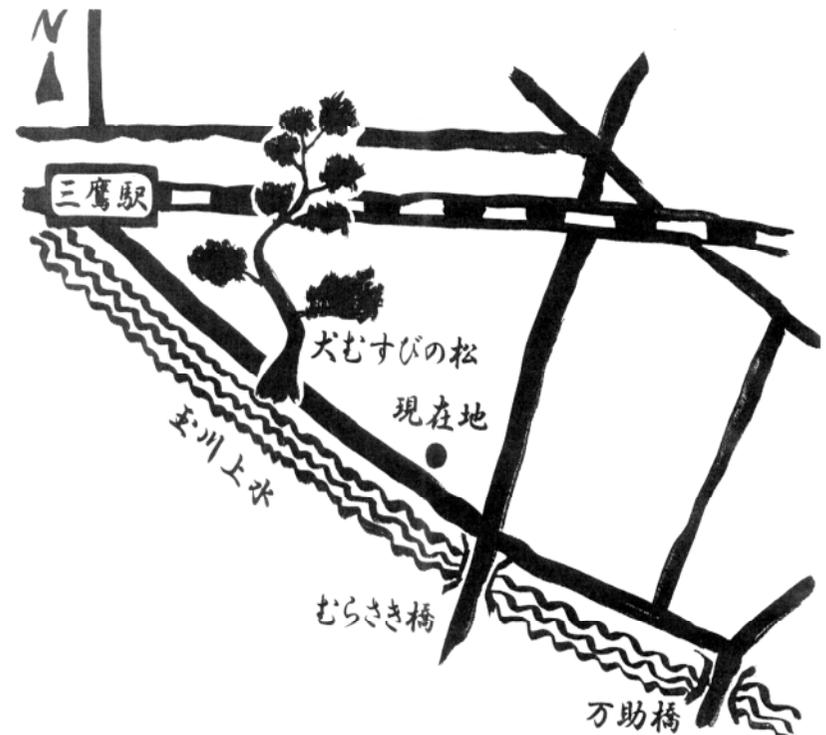


「犬むすびの松」

江戸時代から厄除けの松と知られ、武蔵野市の民話に語り継がれてきた「犬むすびの松」(クロマツ・推定樹齢100年)が、平成元年、マツクイムシなどの被害を受け伐採されました。伝承によると、近くの旧家の敷地内に当時「山犬」と呼ばれたオオカミの親子が住み着き、田畑を荒らすキツネやタヌキを退治することから、多くの農民から神様・厄除けとしてあがめられていました。

ある時、そのオオカミが死んでしまったため玉川上水沿いの松の根元に葬りました。毎年命日の4月15日には握り飯(赤飯)を供え、「厄除けのお犬さまのおむすび」として農民や子供たちに配ったと伝えられています。麦や雑穀を主食にしていた地域の人たちにとって握り飯は大変なご馳走であったそうで、オオカミ信仰としてこの習慣は昭和15年ごろまで続いたとされています。

こうした歴史を踏まえ、古くから伝わる「犬むすびの松」の言い伝えを伝承し、この公園のシンボルツリーとなるよう松を植樹しています。



平成27年3月